

9月総評 西躰かずよし

今月は静謐な印象の作品に惹かれた。静謐は生と死の間に横たわるもののようみにえた。

つまさき波にふれて  
多分ことばは流れてしまった 旭日 百（滋賀県）

「つまさきは」と書かずに敢えて「つまさき」とだけ書いたのは、かなしみのせいかもしれない。そして「ことばは流れてしまった」のまえに「多分」と書いたのは、その場面に立ち会うこともなく、ことばが既に流れてしまったことを知ったからだろう。

こっちと思った方が正解だと  
教えてくれた 花火を持った 藤色（京都府）

「教えてくれた」のあとに置かれた文脈上の空白（断絶）が、語り手の花火を持つまでの心の揺らぎを表している。こっちと思った方というのは花火の持ち手のことだろうか、それとももっと大きな選択のことなのだろうか。

ひらがなになってゆく  
波寄せるたび 細村 星一郎（東京都）

波寄せるたびにひらがなになっていくというのは、何かの暗示のようでもある。徐々に老いて、死に向かっていくいのちのようにも見える。

美しいもの  
夜になる五分前の空  
世界が明るくなり始める  
日の出の二分前 桜咲（千葉県）

一読、枕草子を想起した。日没と夜明けを「美しいもの」と言い切った思い切りがすがすがしい。生へのまっすぐな肯定感が伝わってくる。

「彼は  
風のおいがわかる人」

君はもうあっちに  
いってしまうんだな。

翠（東京都）

映画のワンシーンのようだけれども、それほど多くの言葉を必要としないのは、ここに表現された静けさのせいだろう。「彼は風のおいがわかる人」から次のフレーズまでの飛躍がドラマチックである。同じ作者の作品に、「桜 さくよ／この道にさいて／地球に／ちっていくよ」や「あなたをとつぜんさむくする／力でいいからこの身にほしい」といったものがある。この作者の作品からは、喪失とそれに対する愛情が感じられる。